

2011 9

# あけぼの

## 「生きる」—人生のよりどころとなるものは……?

特集 今、生きてて良かったと思えれば……新谷のり子×山浦玄嗣  
対談 魂の言葉が支配する世に小林和男 がんばっぺ、福島! 今泉ヒナ子  
将来は自分たちの心が創る—地球への責任イヴリー・ギトリス

連載 “ことばの杜”への小道 Part II / かすかな光を見つめて—広島県「ほんごう子ども図書館」設立10周年に出席・大田 勇氏、森 康行氏／山根基世  
ミステリアスな日々/「気の咎め」と「怠りによる罪」木崎さと子  
活憲とヒューマンライツ(人権) / 町が消えた大地震の被災地から伊藤千尋  
光と風のおくりもの/「夏休みのサムライ」三浦暁子  
キリストの足跡/使徒たちの信仰百瀬文晃



## 「ことばの杜」への小道

Part II

# かすかな光を見つめて —広島県「ほんごう子ども図書館」設立十周年に

大田 堯

おおた・たかし

森 康行

もり・やすゆき

山根基世

やまね・もとよ



第9回

広島県三原市本郷駅前にある公設民営の「ほんごう子ども図書館」が設立十周年を迎え、本郷町内で記念式典が行われました。その後、できたばかりの大田堯先生のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」が初公開され、上映後、短い時間でしたが、森監督、大田堯先生、ナレーターの山根基世氏の鼎談が行われました。(司会:あけぼの編集部) 今月号では、式典が始まる前の大田氏と山根氏の短い会話、統いて鼎談を収録いたしました。

斜めに社会状況を見る風潮があつて、将校になる気もまったくなく、軍人勅諭を全然覚えられず(笑い)なんでおまえ、東大を出てて、それが言えないのか! と

言われて。

山根 あの時代はまだ、国民一人一人がものを考えることのできる時代だったのではないですか?

大田 一部残つていきました。

山根 朝鮮戦争以降なんですね、日本の教育がだめになつたのは。

大田 戰後ね。

山根 先生ご自身の戦争体験が原点になるのですね。

大田 一兵卒でしたからね。旧制高校にはまだマルキシズムや大正デモクラシー期のものが残つていて、本は全部取り上げられていたけれども、

大田 強くなるばかりでした。ぼくが教育とは

山根 どうしてこうなるのか、と地団駄踏みたくなりますね。

大田 裁判所を責めるよりも日本人全体の意識の問題があると思います。教育とは、というものの認識が十分に国民の間にとらえられていませんね。

山根 一から出直さないと。

大田 明治からほんとうは出発していたわけで、学校制度は人材養成機構でしょう。下から上まで国益に沿う人材を養成するためのシステムになつてしまい、本当の人間教育に目覚めるチャンスは異様に阻まれてきましたね。

山根 今度の震災をきっかけに、いい方向に変

大田 教育を通して人材ができ、世の中をよくする。それが教育だと思っていたのですが、どんでもない。かえって愚鈍にしていく。それでもう一度とらえなおそとしたのが、ぼくの教育とは何かを表明する出発点ですね。

大田 教育を通じて人材ができ、世の中をよくする。それが教育だと思っていたのですが、どんでもない。かえって愚鈍にしていく。それでもう一度とらえなおそとしたのが、ぼくの教育とは何かを表明する出発点ですね。

大田 一兵卒でしたからね。旧制高校にはまだマルキシズムや大正デモクラシー期のものが残つていて、本は全部取り上げられていたけれども、

大田 強くなるばかりでした。ぼくが教育とは

化していくべきですが。

**大田** そのとおりですが、震災は物と金の支配している社会の中で起こったことですね。だから物と金で復活すると思つたら大間違いで、残されているいのちの問題、いのちの絆の問題、これが本当の復興なんだ、という展望がないと…何べく

— まさにこの映画を撮られた森監督に皆さんにお話を伺いたいことを語つていただきたいのですが…

**森** ドキュメンタリー映画監督。作品に「こっぽんは『瀬戸川』『さきの海は死れない』」ほか多数がある。

私がこの映画を通して皆さんと共に考えておきたい一番のことは、この映画の中で先生が何度もおっしゃっていますが、「教育」は、教育ではなく、教育で、援助するものだということ。その人のことを介護したり、援助したりすること。映画出てくる「太陽の家」ではできない部分を補う、という言葉が出てきますが、そのことをさまざまなかな場所で考えておきたい、と思っています。これはまさに大田先生が考えてこられたことで、例えば人間はどういうことができるのか、と私なりに思いました。

私自身もそういう人間になっていきたいと思う。ともすれば自分中心に、



ある。

**山根** 大田先生のご高名はよく存じあげておりましたが、森監督から問い合わせをいただいたと



— まさにこの映画を通じて皆さんと共に考えておきたいことを語つていただきたいのですが…

**森** 「瀬戸川」「さきの海は死れない」ほか多数がある。

私がこの映画を通して皆さんと共に考えておきたい一番のことは、この映画の中で先生が何度もおっしゃっていますが、「教育」は、教育ではなく、教育で、援助するものだということ。その人のことを介護したり、援助したりすること。映画出てくる「太陽の家」ではできない部分を補う、という言葉が出てきますが、そのことをさまざまなかな場所で考えておきたい、と思っています。これはまさに大田先生が考えてこられたことで、例えば人間はどういうことができるのか、と私なりに思いました。

— ナレーションの山根さんは、どのように大田先生を表現しようと思われたのでしょうか？



— タイトルの「かすかな光」についてお話をしください。

**大田** この映画ができた直後に三・一一が起きました。私のかつての友人で、尊敬していた高木仁三郎という方が、十数年前にあすこは危ないと予言して、原発のことを非常に心配していました。二〇〇〇年に亡くなられましたけど。その予見が的中したのですが、同時にぼくは、津波に加わる

レルとか、原発を止める止めないとか、何シーベルトなら安全、ではすまないわけです。もっとその底を見つめ、何が起きたのか、起こしたのかを考え、少しでも生き方を建て直すことをやらないと。

**山根** 先生のお話をできるだけいろいろな方に伝えていきたいですし、私は教えていただきたい

私はとりわけ非常に自分中心の人間ですので、そう考えるのですが、今回撮ったこの映画を糧として、私自身もそういう人生を歩んでいきたいとうふうに思っています。

— 作品を完成させるうえで、残念ながらフィルムからはずれたテーマがあれば…

**森** 先生は、講演やインタビューで「教育はアート」だとおっしゃっています。しかしそこの部分は構成上ごつそり落としています。最後の最後、先生から入れてくれと言いましたが、観ていただいたお客様さまに委ねたほうがいい、と申しました。先生から最後にちょっと小さな声で一言、夜眠れないな、と言われました。ほんとうは先生のお話を交えて展開できればよかったです。

— ナレーションの「かすかな光」についてお話をしください。



— タイトルの「かすかな光」についてお話をしください。

**大田** この映画ができた直後に三・一一が起きました。私のかつての友人で、尊敬していた高木仁三郎という方が、十数年前にあすこは危ないと予言して、原発のことを非常に心配していました。二〇〇〇年に亡くなられましたけど。その予見が的中したのですが、同時にぼくは、津波に加わる

ことがまだまだたくさんあります。

**大田** いやいや私があなたの言葉の哲学に学ばねばならんところがいっぱいあります。ぼくは共感しています。このようにして新しい仲間が増えること自体が、とってもいいことです。



原発の問題の背景に、実はそういうものを引き起す深い原因がどこにあると思いました。それは、今地球全体が物とお金に支配されていて、いのちがおろそかにされている。こういう状況の中から起った問題だと考っています。従つて物と金だけで今回復活、復興が起るのではなく、むしろその背後にある、いのちを大事にしあう基本的人権とも言つべき、人間の尊厳と言つべきもので、人間と人間との関係を創り直す方向に、一步でも一步でも近づく努力をしないと、復興のフの字も出てこないと思っています。

しかしこれは大変困難な問題です。物と金は人間の発明した素晴らしいものです。これをうまく使う、知恵をうまく活用していのちを豊かにする目的に従属させる。これはもう大変に時間がかかるし、遠い重い問題だから、「よく身近なところからすぐ始めるのにはどうしたらいいか」そういう問題で、身近なところから「かすかな光」を目指すのが難しい問題にいどみかける、かまきりが巨人に食いかかるような、ささやかなことを通して、という思いなんです。

——映画の中を流れるメッセージを、言葉としてお話しいただけるとすれば……

**大田** 教育は、やればいいものだと思い込んでいると思うのですが、ぼくは教育によって愚かにされた人間の一人だという自覚があります。教育はいいことばかりではありません、人間を愚かにする力も十分に持っています。現代の教育制度の方は、一人一人の持ち味を育てることがおろそかになっていて皆を束にして占数で評価する。

持ち味を評価するどころか、画一的な対応を求めてことで、その子の持ち味を殺しているのではないか。そういう現実が今の点数制度にはあると思います。これはどうしても乗り越えなければいけない問題で、そうではなく、一人一人を大事にする。そしてその持ち味が、社会的な仕事を通して貢献できるような、そういう育て方の環境を我々が用意する。それが教育なんだ、ということを一番言いたいですね。

——「言葉」に対する思いは……？

**山根** 私はNHKで三十六年アナウンサーとい

う仕事をして、二〇〇七年に定年退職し、同時に「ことばの杜」という、子どもの言葉を育てるグループを作りました。子どもたちがさまざま不可思議な行動を起こし、子どもの暴力行為が六万件を越えるというかつてない数字を示しましたが、その背景には自分の気持ちを言葉で表現できない、あるいは言葉によって周囲の人といい関係を築くことができない。つまり言葉の力がないことが一つの原因として指摘されたので、そういう中で子どもたちの言葉を育てる活動を四年間続けてきて、学校や家庭だけでは子どもの言葉は育たない。地域社会をもう一度作り直さない限り子どもの言葉が育つ環境はない、と痛感するようになりました。

人間という動物は周囲の人の言葉を聞くことで初めて言葉を獲得します。推定年齢八歳で山の中で狼に育てられてた少女が発見され十八歳くらいで亡くなりますが、生涯、人間の言葉を獲得することはできなかつた。産まれたときから、犬はワン、猫はニャーと鳴きますが、鳴禽類や人間などは言

語形成期に周囲の言葉を聞かないかぎり言葉が身につかない。大事な子どもの時期に美しい言葉を聞いておくことがどんなに大事か……。

それで朗読や読み聞かせをしていましたが、今回「ほんごう子ども図書館」のことを勉強させていただい、これからは私ども、「読み語り」と言わせていただきことにしました。私はこの「かすかな光への映画を見たときに、これこそが今やるべきだと思っています。私は子どもたちの言葉を育てるためには、異年齢の人々が何か一つのことを一緒にやる経験をしないかぎり言葉は身に付かないと思っていました。人間がどういうときにはどういう振る舞いをし、それに言葉がどう連動するのか……言葉を学ぶということは人間を学ぶということですね。その人間の関係を見る場が今は無い。でもここにはある。私は子どもの言葉を育てる活動の中で切実に、新しい二十一世紀の地域社会を作らなければいけないと思います。私は関係しているいろいろな委員会で提言をさせていただきますが、そのときに、町作りの核に図書館を置きましょう。そのときのモデルはここ、大田堯先生を中心とした公設民営の「ほんごう子ども図書館」がいい例です、と申し上げています。公設で公がお金を出し、あとは民間の人たちが自分たちの意思で活動し、それが十年続き、横の新しい地域の繋がりができ、それが子どもたちとも繋がっています。そしてなにより大切なことは「語る」ことが関わりだとおっしゃっている。そこの人間の関係が新しく組み立てられている。私はこれは本当によいお手本だと思います。



人と人、人と自然とを結ぶ

く。日本の社会だけを見ても、関わりを考えなくてはならない大きな理由が考えられると思います。

——私は九州博多の出身ですが、そういうふうに私の子ども時代は遊びに入れてもううに「かた（ら）せて」と言つていました。

ところで、自分の言葉、考るを自分の生活の中でどのように育てたらいいでしょうか？

**大田** 読み聞かせではなくて読み語りとしたのは、ぼくではなく、ここに来たときにすでに「読み語り」という言葉が使われていました。いろいろ調べましたら、柳田国男先生の昔の国語教育という文献の中で、「語る」ということは、本来関わるという意味であるらしいとおっしゃっています。あたりでは、子どもが遊びに参加したい、関わりたいときに語るという言葉が生き残っているという例をあげたり、さらには、男女が結びつくことを語りと言う場合があると。そういうことから考えると、語ることは関わり合いを作ることなんだとあらためて確認することができます。映画も示していますように、私どもの社会は孤独化の方向に向かっていて関わりが手薄になっていく状況の中、まさに反対の方向の関わり、絆をより強くする、そこを我々の社会の立ち直り、地球の立ち直りの問題として考えていいのではないか、と思います。

单なる「本郷の語る」でとしまってはならぬと思います。ついでに言うと「読み聞かせ」は上から下へ聞かせてやるという印象がありますね。日本の教育界には使役動詞が非常に多い。子どもを立たせる、座らせる、日記を書かせる……すべてさせるでしょう。そつではなくて相手の意図をき

物学的には自己中心に生きるようにできています。でも人に頼り、食べ物に頼らないと人間は生きられない。自己中心でありながら同時に他人に依存しなければならない。この間を我々は選んで生きています。選びながら生きるのが人生です。その選択に関して個々人が責任を持つて判断をする以外にはありませんね。

**大田** まず本物に触れることがすごく大事だと思います。ぼくらは書かれた言葉に頼って分かつたつもりでいるけれど本物に触れる、それが自分に見いだす根源だと思います。その本物に触れることが実は学習です。この意味の学習は、あらゆる生き物が行っています。山根さんは「食いしん坊」という言葉を書いてらして、味覚といふもので「話」を考えようとしていらっしゃる。味覚で受け止めるのはすごいことです。というのは、「話」はものではなく、エネルギーでもない。情報です。情報はどうこに入るかというと脳に入る。脳に入つてそこで取るべきものは取り、出すべきものは出すという代謝活動をしている、というのがぼくの推定です。情報の代謝を繰り返していく中で学習が成立する。だから呼吸の一種であつたり、食事を食べていいのちを繋ぐのと同じくらい情報で学習する。それを教育が助けてあげる。根源的なものである脳の代謝を教育によって助けていく。このような筋を建てて考えるのがよいのかな、とぼくは思っています。

——この映画を一人でも多くの方に見ていただきたいのですが、公開に関しての情報は……？

**森** 七月三十日から東京・東中野駅そばの「ボレボレ東中野」で三週間上映します。それ以外には今繋がりを作っているところで、「繋がる」というのが、私のこの映画での一番大きなテーマです。自主上映などは、ウツキープロダクション（〇三・五二二三・四九三三）が窓口です。

——最後におふたりに語つていただきます

**山根** 子どもの言葉を育てる目標は、子どもたち一人一人が自分の目でものを見、自分の頭で考え方の言葉を話す子ども、そして大人になつてほしい。それが幸せな人生を全うできる世の中を